

<p style="text-align: center;">国 語 2年B組</p>	<p style="text-align: center;">『 お 手 紙 』 ～ がまくん・かえるくんの気持ちを 思いうかべながら読もう ～</p>	<p style="text-align: center;">碓 起 代</p>
---	--	--

1. 単元について

(1) 単元設定の理由

① 一年間の国語科学習の中での取り組みをふまえて

「物語を読む」「絵本を読む」という学習に慣れてきた子どもたちにとって、この「お手紙」は、今まで以上に親しく向き合えるお話であると考えた。

私は、4月当初から読む楽しさを味わわせる一方法として「声に出して読む」ことを大事にしてきた。書かれている内容を正しく読解するためには、一字・一語・一文に注意しながら、一連の文章を声に出して読むことが大切である。声に出して読むことで、より言葉を意識し、場面の想像につながる。そして、読解を進めていく中で言葉の意味を理解し、より場面が想像できるようになる。さらに間やリズム、イントネーションなどが加わることにより、深まりのある読みに進んでいくと考えている。子どもたちが自分らしく声に出して読む、楽しんで読む、また友だちの読みを聞いたり、グループで読んだりしながら、また自然に動作も入った読みをする中で、読みを広げ深めていけると考えている。

子どもたちは、自分の読みを聞いてもらいほめてもらおうと意欲的になる。私は、4月からの授業の中でできるだけ読みを聞き合う時間を多く取り入れてきた。この単元においても、友だちの読みと自分の読みと比べながら聞き合う時間を多く取り入れていきたいと考えた。子どもたちは話し合いの場面では、友だちの考えを聞くことで自分が考えていたことを広めたり深めたりすることができる。そのことにより今まで自分がもっていたイメージがよりふくらんだり、また友だちの読みを聞き自分の読みと比べることにより、新たな読みに気づいたりする。そのことはまた、ものの見方、感じ方考え方を深め、互いの高め合いにもなると考えたからである。

授業の中での一人読み、グループ読みや一文読み、一段落読み、時には二人組になり、またグループで読み合ったりする中でお互いの読みを聞き合う。その中では、必ず自分の読みが誰かに聞かれているという緊張場面を設定し、自分の読みのふりかえりの機会も大事にしたいと考えて、授業の流れの中に必ず読みを取り入れてきた。

一学期の「ふきのとう」「スイミー」で、だれがだれに話しかけているのか、どんな様子でいるのか、周囲の様子はどうかなどについて場面の様子を想像しながらの読みを大事に学習してきた。本単元でも場面の様子を想像しながら読み、会話文などからがまくんとかえるくんの気持ちの移り変わりや二人の心の触れ合いを考えさせる活動を取り入れた。

② 単元について

この作品は、がまくんとかえるくんの友情を扱ったアーノルド＝ローベルの一連の作品の一つである。子どもたちにとって、この作品は、がまくん、かえるくん、かたつむりくんという登場人物が親しみやすく、物語の中に入っていくやすい。場

面の推移も、がまくんの家→かえるくんの家→がまくんの家→（四日後）がまくんの家と単純で分かりやすい。何気ない日常生活の中でのがまくんとかえるくんのほのぼのとした友情をテーマにしたこの作品は、子どもたちにとって共感しやすく、想像を広げて読むことにふさわしい作品である。

第一場面では、一度も手紙をもらったことがないとふさぎ込んでいるがまくんの悲しみを、かえるくんは自分のことのように受け止め、「かなしい気分」になる二人があり、第三場面では、ふさぎ込んでお昼寝をしているがまくんと、それをなんとか励まそうとするかえるくんという対照的な二人、第四場面では、かえるくんが手紙を書いたことをうち明けることによって再び二人の気持ちは一つになり、「ふたりともとてもしあわせな気持ち」になる。会話文が多く、二人の心情がいきいきと描かれており、二人の性格や関係、気持ちの移り変わりを考えながら、楽しんで読むことができた。

かえるくんとがまくんの会話を中心に「かえるくんとがまくん」になりきって、声の強弱・目や体の動きを入れながら音読をさせたいと考えていた。ちょっぴりわがままで自分勝手な「がまくん」と一生懸命その相手に優しい言葉をかける「かえるくん」、いずれも2年生の心にぴったりと寄り添える作品であった。手紙を一度ももらったことのないがまくんの寂しく心がいじけてしまうところ、何とかがまくんを喜ばせたくてかえるくんが内緒で手紙を出すところ、がまくんの心を晴れ晴れとさせたいために内緒をうち明けてしまうところなど、気持ちを楽しく想像しながら読ませた。また、頼まれた手紙を懸命に運ぶかたつむりくんの楽しさなど、楽しみながら読み「すぐやるぜ。」「今まで、だれも、お手紙 くれなかったんだぜ。」という言い回しも子どもたちがどう表現するか期待するところであった。

少しずつ内容理解ができる子どもたちに、がまくん、かえるくんの気持ちにせまり、会話が多いこの作品の特徴を生かして登場人物どうしのやり取りを、体全体を使った音読をとおしてたっぷり楽しませたいと考えていた。

③ 2Bの子どもたち

本学級の子どもたちは、明るく活発で、大変元気である。楽しいことや興味があることには、とても積極的に取り組む。

朝の読書タイムの様子を見てみると、一学期頃は、今日は何を読もうかと迷っているうちに時間が過ぎてしまう子どももいたが、最近では大多数の子は本を読んでいる。読み聞かせの時の子どもたちの目の輝きや子どもたち同士での読み聞かせ、また自分のお薦め本を紹介する姿などから、読書に対する関心が以前より強くなっているように感じている。

国語の学習では、4月当初から「声に出して読む」ことを大事にしながら読み深めてきた。「ふきのとう」、「たんぽぽのちえ」、「スイミー」などの学習で、お互いの音読を聞き合う中で読みを深めたり、話し合いをしてきた。

子どもたちは、自分なりのめあてをもって音読し、そのめあてにあった読みができたかどうかという自己評価とともに、その読みを聞いてもらった人からの他者評価もしてきた。

この「お手紙」の学習でも、友だちの音読を聞くことにより、自分が気づかなかったことに気づいたり、新しい発見をしてくれるであろうと期待していた。また、この教材の学習で、役割読みをすることで、友だちと音読する楽しさ、おもしろさを感じとってほしいと願っていた。

(2) 単元目標

- 場面の様子を思い浮かべたり、想像を広げたりしながら読む。
(読むこと・ウ)
- がまくんやかえるくんの気持ちがよく表れるように、語や文としてのもともとまりや内容を考え、声の大きさ・目や体の動きなど入れて楽しく読む。
(読むこと・エ)

(3) 単元計画 (全14時間; 本時 8/14)

第一次 (2)

- ・自分が書いたりもらったりした手紙について話し合う。
- ・「お手紙」の範読を聞いて初発の感想を書く。
- ・初発の感想について話し合い、学習課題を確認する。

第二次 (10)

1
時

(2)

- ・一度も手紙をもらったことがないので悲しい気分で玄関の前にこしをおろしているがまくんと、がまくんの様子を見て心配するかえるくんその二人の様子や気持ちを読み取り音読する。

2
時

(2)

- ・大急ぎで家に帰り、手紙を書いて、その手紙をかたつむりくんに頼むかえるくんと手紙の配達を引き受けたかたつむりくんの様子や気持ちを読み取り音読する。

3
時

(3)

- ・手紙がくるのをすっかりあきらめてベッドでお昼寝をしているがまくんと早く手紙がとどかないかと待ちながら、自分が手紙を出したことを言えずにがまくんを励ましているかえるくん、二人の様子や気持ちを読み取り音読する。

4
時

(2)

- ・手紙のことを話すかえるくんと、それを聞いてとても幸せになったがまくん、その二人が肩を並べて手紙を待っている様子や気持ちを読み取り音読する。

5
時

(1)

- ・手紙がとどきとても喜んでるがまくんとかえるくんの優しさを読み取り音読する。

第三次 (2)

- ・これまで学習したことを思い出しながら音読の練習をする。
グループ・一人で練習する。
クラスで音読発表会をする。

2. 単元の考察

(1) 互いのまなざしが共鳴する実際の姿は

教科提案の中のまなざしの共鳴を生むであろう子どもたちの姿とは、以下のようである。

- ・友だちの発言に対し、目を輝かせながらうなずいて聞いている。
- ・友だちの発言を受け、それをつなげて自分の意見を出している。
- ・友だちの発言を受け、自分の書いた考えに、新たに書き足している。
- ・友だちの発言を受け、自分の書いた考えに、修正を加えている。
- ・友だちの発言を受け、自分の書いた考えに、自信を深めている。
- ・友だちの発言を受け、明らかな根拠をもって反対意見を出している。

本時（三の場面の二）では、はじめにO3が読んだ。読んだ後どうしてそう読んだのかという問いに、「私は、がまくんは、自分に手紙なんてとどくことがないからすっかりあきらめている気持ちで、かえるくんの問いかけにイヤイヤ答えた。かえるくんは、自分が書いた手紙がきっと届くけど、自分が書いたことは言えないし、手紙が届くのがすごく遅いからイライラしている気持ちでがまくんに話している気持ちで読んだ。」と発言をした。これを受けて、Y3、M5や他の子どもたちから「O3の考えに付け足して、がまくんは、もうあきらめて寝ているのに声をかけにくるかえるくんに怒っている。」「かえるくんは、がまくんが郵便受けにお手紙が届いたらとても喜ぶ。そしたら自分もうれしい。だからお手紙を出した。でもお手紙を出していることを言わないでいるほうが、お手紙が届いたときのがまくんの喜びがすごい。」との考えの発言が出てきた。そしてK2とN1がお互いの考えを言い合い、自分だったら＝がまくんは怒っているように読み、かえるくんのところは、イライラしているように読む＝ことをお互いの読みを通して伝え合い、互いの思いに寄り添っていった。学級の子どもたちは、その読みを聞きながら＝自分の読み＝を作り上げていった。このようにがまくんやかえるくんの会話から子どもたち一人ひとりが想像を広げ、がまくんやかえるくんの心情について自分の思いを読みを通して伝えていった。この単元でも、お互いの読みを交流し、なぜそう読んだのかという自分の思いを伝え合うことがまなざしの共鳴になったと考える。

またこの単元を学習し始めると、子どもたちは、アーノルド・ローベル作の「がまくんとかえるくんシリーズ」の作品に興味を示し、読みはじめた。この作品のよさは、ほのぼのとした友情がユーモラスな形で展開されているところにある。子どもたちは、かえるくんの思いやり、友だちに対する友情に心を動かされたいった。ある時、K2が言った。「がまくんシリーズの中でなくしたボタンもおもしろかったけど、私はクッキーのお話が好き。だってかえるくんって本当に友だち思いでやさしいね。かえるくんが、棚の上に箱に入れたクッキーを置いたのは、いじわるではなくて、がまくんの身体のことを思ってしたことだから。」この言葉から私は、がまくんとかえるくんの本当の友情に心を揺さぶられていることが感じとることができた。ここでも一つの「意味と内容の広がり」が見られた。

3. 成果と課題

子どもたちは、物語を場面ごとに読み進め、その都度どうしてそう読むのかということのがまくんとかえるくんの気持ちに寄り添いながら自分の思いを伝え合っていた。お互いの読みの交流を通して、自分とは違う新たな見方・考え方に気づくだけでなく、よいと思った考えを受け入れ、その後の自分の読みに生かしていった。

一時間の授業の流れに必ず単元全体の読みとその場面の読みを取り入れることにより、子どもたち一人ひとりが、文章全体を常に意識した場面の読みができ、がまくんかえるくんの気持ちについての話し合いがより深まっていた。

さらに、全体読みを教材文との出会い時と最終のまとめの読みとをテープにとり、聞き比べをしたことで、子どもたちは、自身の初発での読みと、学習後の読みを比較することができ、学習の深まりと共に読みの変化を理解するとともにその後の学習へとつなげていけたのではないかと考えている。

今後は、子ども一人ひとりが自分の読みに自信をもって表現し、互いのよさを認め、高まるために一人ひとりの思いがまだまだ出し合える、温かい学級集団をつかっていきたい。